

## 1.1 NISMAIL/Linux Version5.0

### 1.1.1 機能概要

NISMAIL/Linux Version5.0 を、CLUSTERPRO X環境下で利用する際の機能概要について以下に記述します。

(1) 片方向スタンバイ運用のサポート

NISMAIL/Linux Version5.0を現用／待機両系のサーバにインストールし、フェイルオーバー発生時に待機系サーバを使って運用を継続することができます。(NISMAIL/Linuxは、シングルインスタンス/ノードです。両方向スタンバイはサポートしません。)

(2) フローティングIPアドレスによる通信

フローティングIPアドレスを使用することにより、フェイルオーバーが発生した場合、相手システムからは、サーバが切り替わったことを意識する必要がありません。  
待機系サーバで自動的にファイル転送を再実行します。

(3) 起動型アプリケーションの再実行

起動型アプリケーション(EAP)の実行中にフェイルオーバーが発生した場合、フェイルオーバーが完了した時点で、待機系サーバで起動型アプリケーションを再起動します。

### 1.1.2 機能範囲

NISMAIL/Linux Version5.0 は、二重化システムにおいても、通常のシングルサーバと同様に動作します。

### 1.1.3 動作環境

NISMAIL/Linux Version5.0 は、以下のOSをサポートしています。

- Red Hat Linux 6.2以上
- Miracle Linux Standard Edition 1.0以上

### 1.1.4 インストール手順

以下の手順に従って、インストールおよび初期設定してください。

ここで特に説明していない項目については、「NISMAIL/ Linux Version5.0利用の手引き」を参照してください。

(1) NISMAIL/NT Version5.0のインストール (必須)

現用系／待機系ともに、「NISMAIL/Linux Version5.0」の媒体を使用して、NISMAILをローカルディスクへインストールします。NISMAIL/Linuxのインストール方法については、「NISMAIL/Linux Version5.0利用の手引き」を参照してください。

(2) 簡易スケジュール機能のインストール (任意)

現用系／待機系ともに、「NISMAIL/Linux Version5.0」の媒体を使用して、簡易スケジュール機能をローカルディスクへインストールします。簡易スケジュール機能のインストール方法については、「簡易スケジュール機能利用の手引き」を参照してください。

(3) 基本環境定義の実行

「NISMAIL基本環境定義」は現用系でのみ実行します。

作成する「環境ディレクトリ(/FILES)」は、クロスコールディスクに作成します。

起動・停止シェルや各種シェル内のパスを環境に合わせて編集します。また、待機系でも同様に編集します。

(4) NISMAILディレクトリ環境設定

現用系サーバの、NISMAILインストールディレクトリにある以下の3つのディレクトリをクロスコールディスクの任意のディレクトリにコピーします。

EDIFLD

EDITBL

EDITMP

コピー後、NISMAILインストールディレクトリ（規定値：/home/NISMail/）にある2つの初期化ファイル(ediais. ini edisch. ini)の記述を環境に合わせて編集します。また、待機系でも同様に編集します。

●ediais. ini

[Directory]

TCPath=/home/NISMail/FILES

TablePath=/home/NISMail/EDITBL

FolderPath=/home/NISMail/EDIFLD

STDTempPath=/home/NISMail/EDITMP

●edisch. ini

[NISMAILscheduler]

TablePath=/home/NISMail/EDITBL

\*edisch. iniは簡易スケジューラ機能をインストールした場合のみ

(5) 起動型アプリケーション管理設定

環境ディレクトリ(/FILES)配下の、YEAPCディレクトリ配下に、“KILCAN.EAPC”ファイルを作成します。ファイルの内容は問いません。0バイトファイルでも構いません。

このファイルを作成することで、起動型アプリケーション実行中にファイルオーバが発生したときにフェイルオーバー先のNISMAILでジョブが再実行されます。

(6) スクリプトの編集

後述のスクリプトサンプルを参考にして、フェールオーバーグループの開始スクリプトと停止スクリプトを編集します。

(7) フローティングIPアドレスの登録

NISMAILが使用するフローティングIPをTCP/IPのhostsファイルに登録します。hostsファイルは、/etc/ディレクトリの下にあります。待機系でも同様に変更します。

フローティングIPアドレス      パッケージ名称      #コメント

hostsファイル記述例

```
# TCP/IP Hosts File  
  
10.1.2.3                    NISMAIL                    # NISMAIL
```

この指定方式では1つのマシンで1つのフローティングIPを登録することしかできません。つまり1つのマシンで動作するNISMAILの各転送機能で共通のフローティングIPを使用することになります。

NISMAILの起動環境単位・転送機能単位にフローティングIPを使用したい場合は「NISMAIL/Linux Version5.0利用の手引き」を参照してください。

(8) パッケージ名称の登録

NISMAIL起動シェルの環境変数に(7)で登録したパッケージ名称を登録します。待機系でも同様に登録します。

```
環境変数名                    : NM_BIND_NAME  
値                             : パッケージ名称 (例 NISMAIL)
```

(9) クライアント・コントロールパネルの切断モード

NISMAIL起動シェルの環境変数にパッケージ名称を登録します。NISMAILの停止時に強制的に切断します。待機系でも同様に登録します。

```
環境変数名                    : GSV_MODE  
値                             : 1
```

## 1.1.5 スクリプト作成の注意事項

- (1) 「NISMAIL基本環境定義」を行ってから、スクリプトを編集してNISMAILを起動してください。
- (2) NISMAIL集中監視機能を使用する場合、「NISMAIL集中監視エージェント設定」を行ってから、スクリプトを編集してNISMAILを起動してください。

## 1.1.6 スクリプトサンプル

フェールオーバーグループの開始スクリプトおよび停止スクリプトへのNISMAIL起動・停止シェル記述例を以下に記載します。

NISMAILの起動・停止タイミングは運用を考慮して設定してください。

### ①開始スクリプト

```
/home/NISMail/run/Start_Bsh mw
/home/NISMail/run/StartSCH_Bsh
```

\* /home/NISMail/run/StartSCH\_Bsh は簡易スケジューラ機能を利用するときのみ

### ②停止スクリプト

```
/home/NISMail/run/Stop_Bsh
/home/NISMail/run/StopSCH_Bsh
```

\* /home/NISMail/run/StopSCH\_Bsh は簡易スケジューラ機能を利用するときのみ

## 1.1.7 注意事項

### (1) ウォーム・モードでの運用

ファイル転送中やジョブ実行中に、フェイルオーバー等でNISMAILの実行が強制的に停止された場合、次回の起動時に前回の動作を継続するよう「ウォーム・モード」で運用してください。

「コールド・モード」のまま運用した場合、フェイルオーバー発生時に「ファイル転送」や「アプリケーション起動」等の各機能で、データファイルの抜けや追いつきが発生することがあります。

### (2) 転送相手 NISMAIL上のノード定義

ファイル転送相手となる他システムや、クライアント・コントロールパネルを実行するシステムでは、フローティングIPアドレスでアクセスするように hostsファイルに記載してください。

### (3) NISMAIL停止シェルについて

NISMAILサーバおよび簡易スケジューラ機能の停止シェルは、NISMAILの停止を待ち合わせません。NISMAILが完全に停止してからディスク切り離しとフローティングIPアドレスの切り替えが必要となります。そのため、NISMAIL停止コマンド実行後にNISMAILの停止を待つ処理を入れてください。